

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒 207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
<http://tohoku-saiko.jp/>
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create , TOHOKU!

2 0 2 6 年（ 令 和 8 年 ） 3 月 16 日 月 曜 日

無料

第166号

毎月発行

発行 2026 年（令和 8 年）3 月 16 日 月曜日

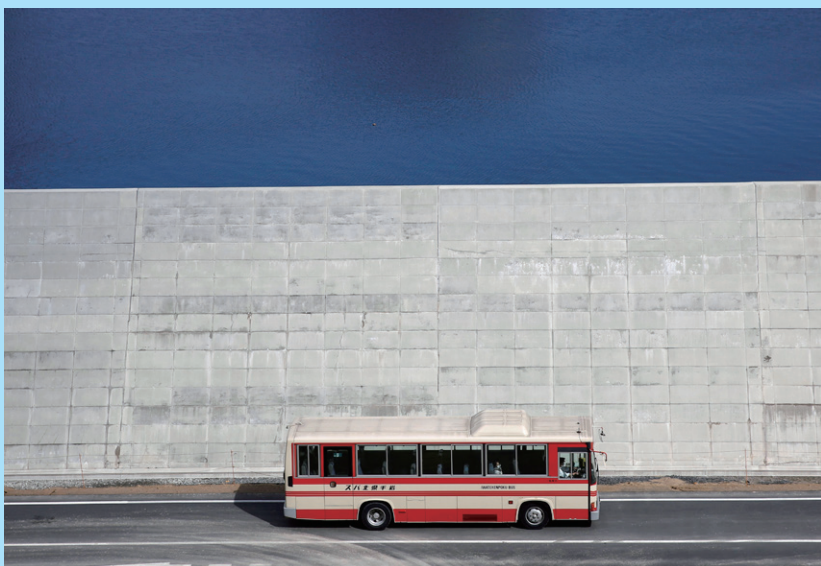
【当新聞発行責任者
兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ。72 歳の新人映像作家兼プロデューサー兼作家。趣味は古代史・縄文文化研究。現在、埋もれた歴史を掘り起こす歴史書籍増大と IPO サポートを専門とする会社を今年 4 月に起業。電子新聞『東北再興』の発行責任者兼編集者兼記者でもある。



東日本大震災発生16年目以降は復興支援が途絶える厳しき経済復興の幕開けである 猶予状態の被災地に地獄の苦しみが訪れる



高さ12.5m巨大な防潮堤の内側で生活を立て直す
岩手県山田町（2018年 ロイターより）

満十五年でほととずるような状況ではない
テレビでは東日本大震災満十五年の特集番組をあちこちで放送している。
そこでは基本的スタンスとして大震災は「過去の終わった出来事」と扱われている。また、復興インフラ

は一応の完成を見たという論調も多数見受けられる。しかし、被災地がほとと一息つけるような状況にあるとはとても思えない。そうした点において、震災直後もそうであったが、再び、被災地とそうでない地域・人々・機関・組織との大きなねじれが拡大しそ

うな動きをひしひしと感じ、さらに被災地の孤立と孤独感がますます膨らんでいく気配を感じるのである。
人口流出は二次災害ではないのか？

震災発生以来の十五年間で、被災地から人口が流出した。それはいままも続いている。もう止まらないのではないかと懸念される。

人が減れば、地域の経済は縮小し、地域はどんどん荒廃していく。特に若い人が「外」に出ていく。残されたのは高齢者だけとなる。復興インフラ整備に時間がかかり過ぎたのが人口流出に拍車がかかった原因とも言われている。

さらに、そうした被災地域に巨大な復興インフラが林立する図は異様である。そうした光景があちこちにみられるのが今の被災地ではないのか？

それにしても、人口が大きく減少し、いままも減り続ける被災地をどう再建しろというのだろうか？

これは直接的な大震災被害とは別の「二次災害」と呼ぶべきではないのか？
これだけポロポロになっってしまった被災地を放置したまま、復興事業は表向きは終わったと本気で言えるのだろうか？

**巨額な復興予算
四十一・五兆円は国民分断の元**

最近の国家予算一年分の三割以上にも相当する復興予算一総額四十一・五兆円と聞くと、事情をよく知らず、被災地とはほぼ無縁の人から見れば、被災地はよくもこれだけお金を使ったなどと思うことだろう。

東日本大震災満十五年と聞けば、これ以上復興に予算を投入するのはもういいだろうという声が聞こえてきそう。そして、いまでも「復興特別所得税」を払っているのだが、いい加減止めて欲しいし、いつまでも被災地のために負担するのは嫌だとも思うかもしれない。

確かに、復興関連に莫大な資金を使ったかもしれないが、すべてが被災地のために使われたのかは再検証すべきではないかと思う。

**復興予算四十一・五兆円
兆円の細かな内訳不明**

下のグラフは、大震災発生以来投入された総額四十一・五兆円の復興予算の使途別内訳である。

しかしこの内訳で何となく分かったような気にさせ

るが、実はよく分からない。

特に、住宅再建・復興まちづくり十三兆五千九百六十二億円の内訳がよく分からないのだ。

この中には、防潮堤や道路といったインフラ建設などに使われたお金も含まれているのだろうか？

もしそうならば、被災した住宅の再建、絶対必要な道路などのインフラ復興は別として、被災地住民の大半が望んでいなかった無用の巨大インフラまで含まれているのではないのか？

また、福島第一原発に関する費用は八兆四千六百三十四億円と全体の二割に相当する予算が投入されているが、これは国の責任であり、別建てにすべきではないのか？

巨大インフラや福島第一

原発に関する費用を除けば、一挙に半分近くまで減少するのではないだろうか？

被災地自治体を苦しめる無用の復興インフラ

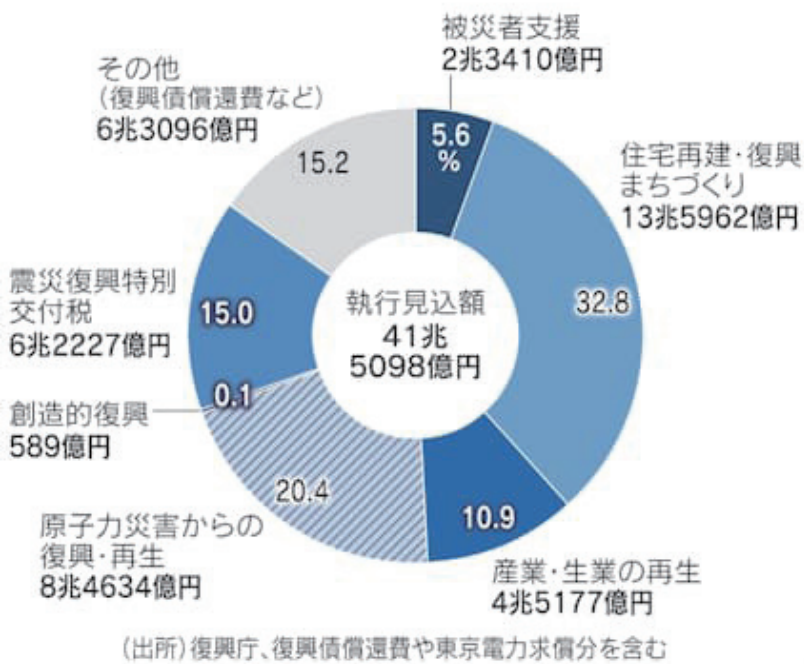
この記事の中段の写真が東日本大震災からの巨大インフラ復興を象徴している。しかし、こうした高さ十二・五メートルの巨大な防潮堤は今後笑えない代物になるのである。

この巨大インフラのメンテナンス費用が、各自治体の負担になるという。無用の長物を押しつけられたうえの費用負担？笑うに笑えない状況だ。

弱体化し倒産危機に直面する被災地中小企業

これらを考慮し、当新聞は紙面を変更して十六年目以降に対応する。特に、中小企業の課題をシリーズ化で追跡して行く予定である。

復興関連予算の執行状況(2011～24年度)



復興に41.5 兆円を使ったというけれど
・・・日経新聞から

まことに残念！WBC侍ジャパン準々決勝で敗退 大谷選手はじめ東北出身の選手たちも残念だったであろう 地上波でもBSでも放送せずファンは観戦できずイライラ

明日が新聞発行日なので、できれば余裕をもって早めに原稿を書き上げたいとは思っていた。

が、しかし、どうしてもWBCの準々決勝での侍ジャパンの結果を取り込んで掲載したくて、締め切り時間とにらめっこしながら、朝からネット速報にかじりついて、試合進行を見ていた。

準々決勝はよほどのことがない限り勝てるだろう、負けるはずがない、準決勝も勝てるにちがいない、あとはジャッジがいるアメリカチームとの決勝戦でどうなるかだと思っていた。

とはいえ、十七日の準決勝も十八日の決勝も新聞発行日が明日十六日なので、残念ながら、次号に譲るしかないなどとのん気に考えていた。

なのに、まことに残念ながら「準々決勝で敗退」してしまった。

WBCに参戦したなかで今回が一番悪い成績となっていました。

日本のファンも、もちろん東北のファンもがっかりしたことだろう。

日本中の、そして東北中の大きなため息が聞こえてきたように感じた。

おまけに、今回の大会は、日本での試合もテレビ観戦できないこととなってイライラしていたところだったので、日本のテレビ業界に八つ当たりしたくなった。「放送しないから、視聴者の応援パワーが届かなかった

たから、負けてしまったじやないか！」と。

＊

予選リーグは非常に順調だった。総当たりで四連勝で、このままいけば決勝までは必ず行くだろうと誰もが思ったであろう。

他のチームが予想に反して苦戦しているのを見るにつけ、日本は順調だと誰もが思ったことだろう。

＊

半年ぶりに実践で見る世界の大会選手は予選リーグ第一戦でいきなり満塁ホームランだし、それ以外にも二本のホームランで打撃絶好調。

投手陣を形成する「岩手の菊池雄星投手」、「青森出身の種市篤暉投手」も活躍した。



予選リーグの大谷選手の満塁ホームラン・・・東スポWEBより

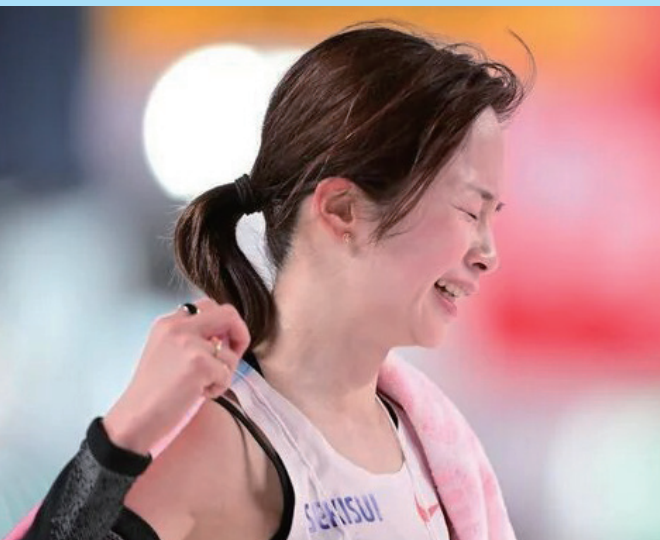


予選リーグの菊池雄星投手・・・J-castニュースより



ベネゼエラ戦の種市 篤暉投手・・・日本テレビより

宮城県大崎市出身の佐藤早也伽選手、ほんと惜しかったね 強豪揃いの名古屋ウィメンズマラソン、僅差で2位 しかし、二年連続出場での連続二位はすごい



名古屋ウィメンズマラソン、2位でゴールした佐藤早也伽選手／写真：アフロスポーツ

宮城県大崎市出身の女子マラソンの佐藤早也伽選手が今月八日、世界最大規模の女子レースである名古屋ウィメンズマラソンに出場して、まことに惜しくもわずか二秒差の二位となった。レース終盤は昨年の大会で一位と二位だったチエブキルイと佐藤の一騎打ちに。佐藤は四十一km付近で離されるも押し戻した。二人はデッドヒートを演じながらナゴヤドームに突入し、最後はチエブキルイが連覇を飾り、佐藤はわずか二秒差の二時間二十一分五十六秒でフィニッシュした。

実は、昨年の三月九日に行われた同じ名古屋ウィメンズマラソンで、国内選考会の対象大会で最速タイムとなる自己ベストの二時間二十五分五十九秒をマークし日本人トップの二位となっていて、奇しくも同じ大会で二年連続の二位という成績である。

今回は「自己ベスト」を目標にできただけに、「そこに全然届かず、ラストに競り負けたのも悔しかったです」と素直な気持ちを口にしていたという。

とはいえ、監督は佐藤の成長を感じたという。「二時間十七分台の選手ふたりと競り合い、ひとりに勝てた。最後まで優勝争いができたのは、彼女が世界陸上で感じた悔しさを常に持っていたからかなと感じています」

佐藤は昨年九月の東京世界陸上で十三位に終わり、目標にしていた「入賞」に届かなかった。その「悔しさ」を抱えながらの試合で、「最後まで優勝争いができたのが一番の手応えなのかなと思います。」と語った。新たな女子マラソンのホープが東北から誕生した。

【東北被災地の中小企業生き残りと活性化】シリーズ①

「倒産予備軍」の倒産ラッシュが始まるのか？

いまは有効な処方せんは存在しないように見えるが・・・

震災発生十六年目からの被災地中小企業の倒産ラッシュ始まるか？

今月十一日で大震災発生満十五年を迎え、表向きには復興インフラも一応完了して、大方の復興事業はほぼ終了したとほとと一息ついているような報道が国中に満ちあふれている。

しかし、そう考えているのは、東北被災地の居住者とその関係者たちとは無縁の人たちだけであろう。

特に、被災地の中小企業は、震災発生から十六年目以降の企業運営に大きな不安と恐れ、あるいは「あきらめ」におそわれているかもしれない。

被災地の中小企業には、震災発生以来、またコロナ禍以来、さまざまな支援金

や助成金、貸付金等が投入され、何とかこの十五年間を生き延びてきた。

しかしながら、そうした多くの支援がこれからは打ち切れ、かつ、借入金の返済が本格的に始まるステージに突入するのである。

二重三重の苦しみ

筆者は、当新聞の発行責任者兼記者とは別に、業績不振の中小企業の再建・再生と株式上場を企業としてきたので、被災地の中小企業の行く末がリアルに想像できる。

はつきり言えば、これから、いきなり企業運営のハードルが二段階、三段階引き上げられるということだ。まず、被災地は、震災だけでなくコロナ禍により人口も減少し、その結果、需要も

減少した。そうしたなかでの経営を強いられる。次は、戦争があちこちで起きている混乱を深める世界や、その影響を受ける日本の経済が、以前にも増して厳しい経営環境という試練を与えるのだ。

そうして諸物価が高騰し、企業のコストダウン努力を無残に吹き飛ばす。

それでも企業は生き残っていかねばならない。次いで、借入金を返済するための「利益」をどうして

も産み出さなければならぬのである。そうしなければ倒産への道まっしぐらとなるのである。

こうした状況を脱出する方策はすぐには思いつかないだろうし、ひよつとしたら存在しないのではないかと絶望するかもしれない。

こうした東北被災地の中小企業が置かれた状況を前提にこのシリーズを開始しようと思う。

震災補助金を受けた事業者の倒産が急増か？

東北被災地の三県全体を数値で見えてみる。

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故で被災し、設備復旧を支援する国と県の「グループ補助金」を受けた岩手、宮城、福島3県の中小事業者の倒産件数が、二〇一一年度の制度開始から昨年末までに二百三十九件だったことが、各県への取材で判明した。

二〇二〇年末ごろは累計約九十件だったため、五年間で倍以上になった計算になる。

原材料費のコスト高など

が要因と指摘する声も出ているようだ。

被災地には経済再生のため多額の公費が投じられた。中小企業庁などによると、グループ補助金は北海道や東北三県など八道県に約五三四〇億円を交付した。岩手、宮城、福島の三県だけをみると約四千九百三十億円となる。

昨年末時点の倒産は岩手の事業者が三十六件、宮城は八十四件、福島百十九件。岩手と宮城は業種が明らかで、最多は岩手が水産加工と小売りで各八件、宮城は水産・食品加工の三十五件だった。

福島県の状況

次に、福島県を単独で見てもみよう。

帝国データバンクは独自

に算出した指標「倒産予測値」をまとめた。

それによると、福島県内企業で算出可能な約二万三千社のうち、一年以内に倒産する可能性がある「高リスク企業」は二千二百五十二社（9.8%）に上った。

これは、全国平均8.7%を上回る水準である。

物価高の長期化やトランプ政権の高関税政策、新型コロナウイルス禍関連融資の返済などで「企業の経営環境が好転する兆しは乏しい」として倒産リスクは年明け以降も高止まりするとみている。

新型コロナウイルス感染拡大に伴う売り上げ急減に伴う二〇二二（令和三）年の二千三百五十五社（10.2%）が最高で、それ以降は減少傾向だったが、二〇二四

年から再び増加に転じた。

業種別の内訳は【グラフ】の通り。建設が六百九十二社と最も多く、半年で四十六社増えた。人手不足や資材価格の高止まりが構造的な問題として影響していると分析している。特に小規模事業者は経営体力の限界に達しつつあり、倒産が増加する可能性があるという。

製造は五十八社増加の四百八十七社だった。コストの価格転嫁ができるかどうかで二極化が進み、価格交渉力の弱い中小企業は原材料費や人件費の上昇に苦しみ、リスクが顕在化しているという。

従業員数別では、五人未満が千三百二十四社（58.8%）で最も多かった。十人未満に広げると、高リスク企業の約八割を占める。小規模事業者の厳しい経営状況が浮き彫りとなった。

昨年一十一月の県内企業倒産件数は八十九件。前年同期から二十三件減少したものの、高水準が続いているという。

福島県は、弁護士や中小企業診断士らでつくる「オールふくしまサポート委員会」による支援策提案制度などを通じ、中小企業の事業継続を支援している。

材料費や電気代の高騰に悲鳴

昨今の資材高騰や人手不足に直面する県内企業の関

係者からは経営の苦しさを嘆く声が上がる。

福島市に本社を構える基板製造業の男性幹部（44）は作業過程で使用する「はんだ」の単価がここ二三年で約五割上がったと言う。材料となる銀の価格も倍になり、機械稼働に欠かせない電気代なども上昇。「経営はとても厳しい」と打ち明けている。

専門性の高い技術が求められる一方、若手がなかなか定着せず、人手確保にも手を焼く状況だという。

所得税など多額の税負担も悩みの種で「少しでも緩和してもらえるとありがたい」と話す。

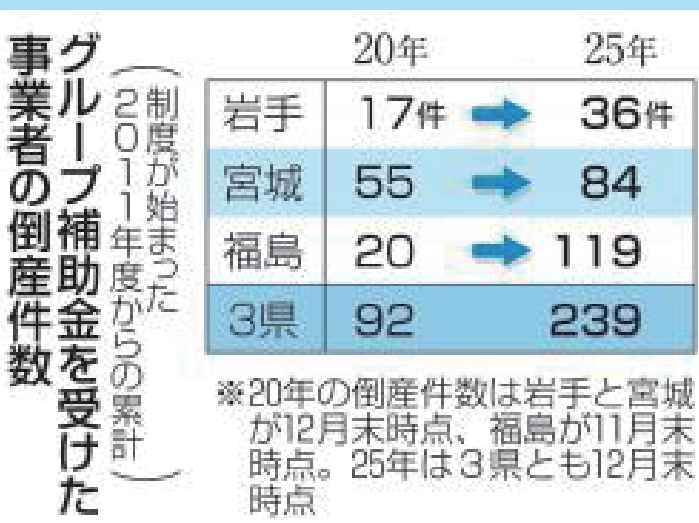
昨年十一月の倒産はすべて不況型という。

負債額一千万円以上の法的整理による倒産件数は八件で、全てが不況型倒産で、主な要因は販売不振だった。業種別に見ると、卸売と小売が各2件、建設、製造サービス、不動産が各1件だった。

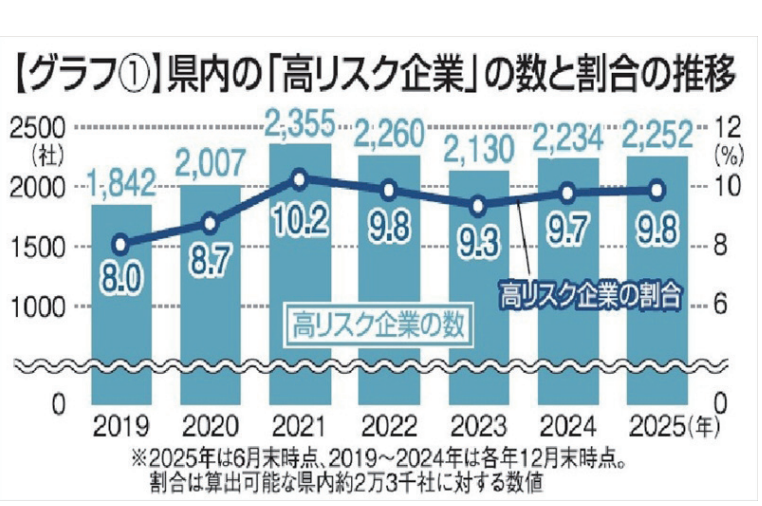
「出口」は見えない

ここまで見てくると、東北被災地の中小企業は八方塞がりであつた「出口」が見えてこないように思える。どんなに優秀な経営コンサルタントでも処方せんは描けないように見える。

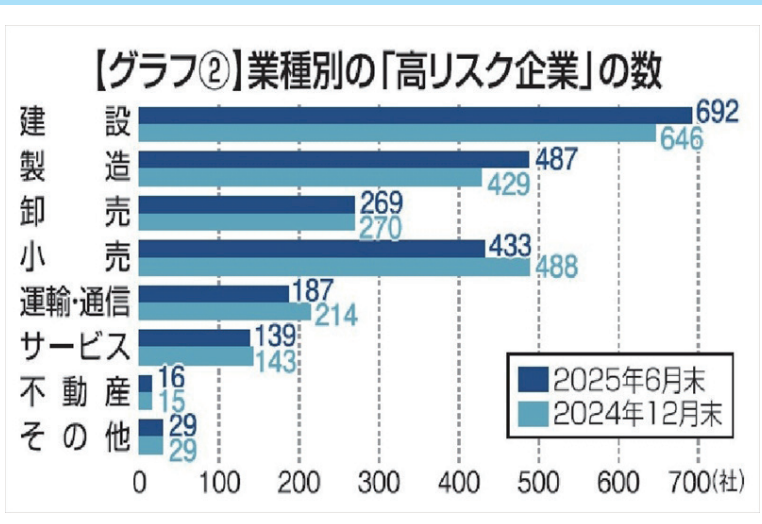
しかし状況は打開しなければならぬ。次号以降でその「出口」探しの挑戦を試みようと思う。



東北被災地3県の震災補助金を受けた事業者の倒産が急増している！・・・秋田魁新報より



福島県の倒産高リスク企業の推移
…福島民報より



福島県の倒産高リスク企業の業種別内訳
…福島民報より

東北水産業の未来 その⑦

陸上養殖と漁業多角化が東北水産業生き残りの道か？

陸上養殖と企業化促進と縄文以来の漁業との並立

東北水産業が背負う多くの諸課題まとめ

シリーズ七回目の今回号にあたって、当新聞および当シリーズで何度も言及してきた東北水産業の多くの諸課題を以下にあらためて列挙して、東北水産業の未来を考えてみたいと思う。

- ① 地球温暖化による海水温上昇で従来獲れた魚が獲れない
- ② 漁業従事者の高齢化
- ③ 漁業従事者の減少と次世代を担う若年層の漁業離れ
- ④ 漁業従事者の低収入
- ⑤ 零細個人の漁業従事者がほとんど
- ⑥ 設備投資が進まず旧来

生き残りをかけた東北水産業が短期間で目指すべき、早期に実現していく方向性

- ① 陸上養殖を主軸に据える
- ② 陸上養殖向け設備投資促進
- ③ 東北独自の陸上養殖業者誘致
- ④ 漁業法人化の促進(個人から企業へシフト)
- ⑤ 次世代、次々世代の魅力的な勧誘
- ⑥ 漁業従事者の収入激増策
- ⑦ 新しい水産業学校誘致
- ⑧ 新たな魚消費策を東北から発信
- ⑨ 旧来の漁業も残して観光事業化

方式のまま

⑦ 企業参入が進まない

ざっと主なものを挙げただけでも、とても明るい未来は描けそうもない。

この現状を短期間に大改革できないと、残念ながら東北水産業はいずれ消滅に向かうだろうと思われる。

そして、縄文時代以来の長い歴史を乗り越え、継続してきた東北水産業の火が消えていくのである。

だからこそ、今回号では、この局面打開の方策を大胆に提言しようと思う。

まず陸上養殖を主軸に

地球温暖化による海水温上昇で従来獲れた魚が獲

ない問題は、日本だけで、ましてや東北だけで解決できるような問題ではない。

それに、解決に向かうとしても即効性はない。とにかく時間がかかるのだ。

それなのに、魚が獲れないと嘆いてばかりではどうしようもない。

何も手を打たずに、その解決を待っていたら、東北水産業はどんどん窮地に追い込まれるのは確実だ。

ではどうするか？

残された道は「陸上養殖方式」に生き残りをかけるしかない。そして、その生き残り策にはオール東北で積極的に取り組むしかない。

陸上養殖向け設備投資

漁業法人化推進

「陸上養殖方式」を積極的に推進するには設備投資が不可欠である。

その設備投資は零細個人の漁業従事者には絶対無理である。

前号で見たように、異業種参入に積極的な企業への誘致と何らかの助成措置が不可欠である。

それこそ、官民挙げて、水族館の魚飼育のノウハウなどもミックスして提供するような東北独自の助成手法も有効かもしれない。

ヒトマネばかりでは競争にならないし、ヒトマネは儲からない。先行者利潤が得られない。

だから、必死に考えなければならぬ。



JR 四国が新設したサーモンの陸上養殖場＝ 2025 年 2 月、愛媛県西条市（写真：共同通信社）

いまの世代で、東北水産業の消滅のきっかけを作っていないのか真剣に話し合うべきであり、早急に結論を出し、迅速にサポートシテムを決め、実行する段階であろう。

そうすれば、「漁業従事者の高齢化」、「漁業従事者の減少」と次世代を担う若年層の「漁業離れ」、「漁業従事者の低収入」、「零細個人の漁業従事者がほとんど」、「設備投資が進まず旧来方式のまま」は、ある意味ではみな密接につながっているといえる。

そこに「陸上養殖方式」促進が加われば、自動的に「答」が出てくる。

若年漁業従事者増加策

これまで、零細な個人事業主の漁業従事者に気兼ねしてきたと思われるが、もうそうした状況ではない。



若い漁業従事者募集「漁業生産組合 浜人（はまんと）一募集広告より

何よりもまず、「漁業従事者の低収入」問題が最初の大きな障害である。いまの時代に、年収二百万円内外の収入しか保証されない職につけというほうがどうかしていると思う。

現在の漁業従事者は高齢者が多く、年金支給分と漁業関係収入の抱き合わせで何とか食いつないでいる状態ではないか？

そうした生活は若者には無理である。したがって、早急な漁業法人化推進で、旧来の漁業従事者から「サラリーマン漁業従事者」への大転換を図るべきである。

そうして、普通のサラリーマンよりも高額な報酬を提示することが必要である。同時に、福利厚生も充実さ

せ、魅力的な「新サラリーマン漁業従事者」をアピールしていくことである。

新たな水産学校誘致

さらに、東北水産業復活にあたっては、魚を獲る、魚を加工するといった狭い範囲の漁業だけに特化しては行き詰まると考える。

魚に関連する仕事はたくさんある。例えば水族館、魚のペットショップ、漁業観光など、たくさん事業の可能性があると思う。

そうやって、漁業のすそ野を広げていくことも、東北水産業の生き残りには有効であると考ええる。

そのために、以前、当新聞で取り上げた神奈川県にある新たな水産学校を東北各地に誘致するというのはどうだろうか？若者は面白がつてくれるかもしれない。

魚消費を活発化する東北発企画や魚観光化

最後に、最近徐々に落ちている魚消費問題がある。消費が減退すれば、他の努力はすべてムダになる。新しい消費の形、新しい魚活用をこの東北から発信するのはどうか？

あるいはまったく別視点で「魚観光」の可能性も考えられる。

すべて新しい漁業だけでなく、「縄文以来の漁業も残して観光化する企画」である。どうだろうか？

決して区切りではない
一五回目の三月一日

あの日から一五回目の三月一日が来た。今年は、強くて冷たい北風が吹いていたが、いい天気で、職場近くの広瀬川の向こうには、弟が好きだった泉ヶ岳がキレイに見えた。

この日だけは今も一日中、心がザワザワしてる感じである。今日中にやらなきゃいけない仕事だけして、今年も午後は休みを取った。

お昼はキング食堂で、揚げたてかつ丼ミニラーメン付を大盛りで食べた。一九三八年創業。戦災、震災、コロナ禍を乗り越えて、今も続く仙台の老舗食堂である。美味しいかつ丼とラーメンでしっかりと腹ごしらえできた。

まず、震災当時に弟が勤務していた若林区役所へ入ろうとしたら、中から出てきた両親とバツリ会った。いつもは弟の最期の場所、荒浜に行く与会えたが、今日は病み上がりの父が疲れ

執筆者紹介

大友浩平
（おとおもこうへい）
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
<http://blog.livedoor.jp/anagma/>



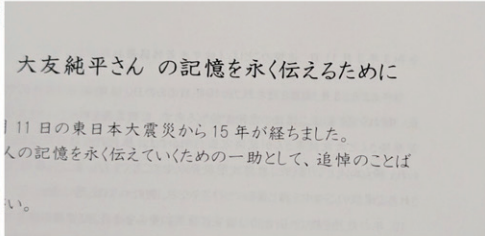
Facebook
<https://www.facebook.com/kouhei.oortomo>

てて荒浜までは行かないつもりだった、とのこと。行き違いにならないように弟が会わせてくれたのかな、などと考えて目頭がじわつと熱くなるのも、今日ならではのことである。

区役所の一階は、今年は献花台がなくなつてすっかり日常の雰囲気だったが、四階には今年も弟のための追悼の場を設けてくれた。前の総務課長の方から「お兄さんですよ、今年もありがとうございます」と声を掛けていただいた。新しい総務課長の方からは、「これからも続けていきます」との言葉をいただいた。

弟のことを忘れないでいてくれること、本当にありがたい。そして、弟のことを忘れないで語り継いでいつてもらえれば、次に同じような大きな震災が起きた際に、命を落とす職員はきつといなくなると信じている。

区役所一階に一般の献花



荒浜に向かう間、北風が

台がなかったのは、今年はすぐ向かいの区文化センターで仙台市の追悼式が行われるからで、その一階にいつもの献花台があった。震災の遺族を招いて開催される市の追悼式、両親が行かないと言うので代わりに出るつもりで行ってみたが、見たら開始が一時半である。これに出てたら地震発生時刻に荒浜にいることは不可能なので、とりあえず受付に顔だけ出してご挨拶して後はあの日弟が通つたであろう道を自転車走って、一路荒浜へ。

冷たくて寒かったが、一五年前のあの日もホント寒かつたなつてことを思い出した。あの時、地震の後に降り出した雪がないだけましか、と思つた。

荒浜で、久しぶりに震災後にできた避難の丘に上つてみた。仙台は平野なので津波を遮るものが何もなく、津波がかなり内陸まで押し寄せて、広い範囲が浸水した。浸水面積は実に二〇平方キロメートルである。仙台市の海岸線の長さがだいたい三キロメートルであるから、平均して海岸からおよそ一五キロメートル以上も内陸まで津波が到達した

ことになる。

避難の丘から海岸を望むと、荒浜沿岸にあった防風林はほとんど津波で流されて、今は櫛の歯が欠けたようになつてるのが見えるが、よく見るとその下から新しく植えた樹がすくすく伸びてきているのが分かる。

震災遺構となつた荒浜小学校では、今年もHope forプロジェクトの風船リリースがあつた。「Hope for」の後に続く言葉はきつと、風船を飛ばした一人ひとりそれぞれの胸の内にあるのだろう。

この荒浜の地に津波が到来したのは一五時五四分。地震発生時刻に一度手を合わせたが、その時点では弟はまだ生きてたので、私にとつては弟が命を落としたこの一五時五四分の方が重要な時刻である。命日ならぬ命時刻である。

弟の遺体は地震発生から

ちょうど四九日目に、荒浜にある南長沼という沼の底から見つかった。今年もこの時刻にそこで手を合わせた。

若林区役所から来た道を戻つて、再び若林区役所へ。あの日、弟もこうして戻つて来られたらどんなによかつたか。有志の方々が区役所の二画に作ってくれた「3・11 不忘の碑」には、今年もたくさんの花が供えてあつた。

帰りに、長町の菓子工房セレブレでホールケーキを。今日生きていることのお祝

いである。今年もプレートにその場で思いついたメッセージを書いてもらった。弟のことを思いながら家で飲むビール、今年はやはり震災で大きなダメージを受けた気仙沼に、震災後に地元を盛り上げようとできたクラフトビール醸造所ブラックタイドブリュイングのビール2種、「Pray for 3・11」と「TOHOKU PRIDE」を。どちらも、あの日に思いを馳せながら飲むビールとしてこれほどふさわしいビールはないだろう。

今年はその日から一五年

ということで、昨年よりも震災に関する報道も取材も多いように思つた。一五年を区切りとして終了する復興事業も多くあるようだ。ただ、大事な誰かを失つた悲しみに、節目とか区切りとかあろうはずもなく、一四年目でも一五年目でも、やはり変わらず同じように悲しいものである。その悲しみを抱えつつ、それでも生きていくことが、遺された人の定めなんだろうな、と思う。

…などということを考えながら、明日からまた自分なりに生きていこうと思う。

やめられない、東北へ― 数奇なる蝦夷の魂燃える国の事

暦上の冬がようやく過ぎ去り感覚的な春が少しずつ姿を現す三月がやってくる、冬の間に散らかった部屋を見渡しつつ、これからどのように片づけていくか・・・などと考える。

というのも毎年四月頃から六月頃にかけて、我が家（独り暮らしではあるが）では季節外れの大掃除の時節で、これは、私がかつて東京から仙台へ転居してきたのが四月末の事であり、東北・仙台における最も過ごしやすく、また街が新緑に溢れ精神的にも希望に満ちるその時期に効率的で快適な新居整備ができたという事績がある為でもある。

例えば、私が仙台に転居してから



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始めると東北好きである。

してから実に二〇年が経とうとしている―成人後東京へ出て過ごしたのが約十五年間だったので、いつの間にかとくに超えてしまっていた事になるのだが、年月の進み具合の感覚が、年齢で違うのか、都市空間の特性なのか、まだまだ東京で過ごした年月の方が長い気がするのである。本稿では、身を以て現代の地方回帰を実行した自身とその身に影響を与えた先人の生き様を通して、東北という郷土に人が向き合っていく未来について随想したい。

※ 創作を志すという名目でもなくも東京へ出た私で、あつたが、正直明確なビジョンがあつた訳ではない―小さな映画仲間らと作ったり、ライブハウスで何故か紙芝居をやったりしていたが、年々アイヌ民族関連やそこから発展し東北に関する書籍を読み漁るのに割く時間が多くなり、結局東北関連の創作をしたいのであつて、東京でやりたい事は何も無いのだという事に気づいてしまふのだった。

同じように何事かを成す事を夢見て上京していた友人（北関東出身）からは「田舎に引込むのは年を喰ってからでいいだろう」と強く言われていた。東京は夢を追うところ、地方は夢破れ、諦めた者の逃げ帰るところ―という固定観念が強烈に浸透していた時代だったのだから、無理もない。何しろ未だ時流ではなかった地方への回帰、周囲の誰もやろうとしない、価値もないような事―東北に今一度「住み直す」夢を実現する、というのだから。

十八世紀英国の文学者であるサミュエル・ジョンソンの有名な言葉に「ロンドンに飽きた者は、人生に飽きた者である」というのがある。ロンドンは人生で経験し得る最上の楽しみと発見に満ち、且つ凝縮された世界一の都市なのだから、ここを退屈に感じるならば最早生きる喜び自体を失っているも同然である―という事のようにだ。

非常に明解で、現代でも受け入れられやすく東京一極集中を依然「是」とする層には引用もされそうな、究極の都会至上主義的主張であるが、確かに十八世紀当時の、産業革命が起きたロンドンでは特にそのような感慨は問答無用な確信と共感を持たれたものであつたに違いない。何と云つても、十八世紀どころかつい数十年前まで、日本でも情報や物資の流通の関係から大都市とそうでない地域との環境格差は凄まじく、まさに別世界と言つて良いものだったのだから・・・だが現代のロンドン始めとする欧米の大都市、ましてや東京で同様の内容を言い放つ事は、少々無謀であり、多

分に大いなる錯覚ではないのか、と非難を浴び兼ねない―今や世界一の規模を誇る都市・東京ではあるが、そこが日本という南北に多彩でユニークな国を凝縮した、つまり外国からの観光客がここに来れば日本一周したと同じくらいの面白さを持つ場所と言えるか―答えは、おそらく否である。

東京は面白い所だが、飽くまでもそこは東京ではない。それは仙台でも同じで、ここに来れば東北を全部見たと同じ事になるか？の問いへの答はやはり否、となるだろう。そもそも、ジョンソンの時代においてさえ、ロンドン以外の地方都市や田園地域には何もなかったかのような発言は、都会という箱庭しか知らぬ者の驕りであつたかも知れないのだ―日本の昭和末期と同様、却つて地方は未だその地域らしさと大都市とは別の豊かさを保つていたのではなかっただろうか。

東北へ向かう決意を固める以前、私はアイヌ民族や東北に関するアイデアを東京で生かせば良いのではないかと考える事もあつたが自身には決定的に不足しているという不安が拭えなかつた―北の民俗への理解、それを裏付ける生活者としての実感、実体験が・故に東北を知りたい、東北で生きたい、その渴望ばかりが膨らんでいったのである。しかし当初から、私の東

北への想いの形は複雑であつた。岩手県盛岡市は、長年続ける旅で通つた、特別な思い入れある街で、無論移住候補地でもあつたが、転職面、気候面など懸念点も大きかつた。盛岡で失敗し、泥水を吸ふような悲惨な思い出の地にしたくないとの想いが、より温暖な大都市・仙台への段階的な移住というある意味の折衷案へと向かわせる事になる。

仙台は、『遠野物語』に関わつた岩手人・佐々木喜善が遠野より移住し、創作活動を続けながらも貧窮の内に没したとされる終の地であり、何故か私は東京に埋もれたまま窮死するくらいならば仙台でどんな悲惨な末路でも受け入れようという妙な覚悟を決めたが、

仙台で駄目ならばどこに行つても駄目だろうという冷静な判断もあつたと思う。結果仙台はまさに自身にとつて東京以上に悲喜こもごもな記憶に満ちた愛憎混沌の都となつたのである。

この選択が正しかつたのかどうかはわからない。だが様々な状況を鑑みて、当時新天地を仙台に選定し、ここでの生活を続けてきた事が極めて必然的である事は間違いないように思われる―それは、ある意味自身の限界を認める事でもあつたが、反面もし意を決して盛岡を選んでいたらどうなつていたか、と今でも想いに耽る事があるのである。

仙台では慣れない職種を転々とする中で震災に遭いその後東北について考え語り合える集いへの誘いを受け、その進展で創刊された本誌にて寄稿し自身の東北への想いを世に問うという稀有な機会に恵まれる。学のない自身にとつて、東北の様々な方面について書く事はそれ自体が自身の学びの場であり、東北という時空間に敷かれた無限とも思われる知の鉄路上に、私は宮澤賢治、佐々木喜善に続く仙台そして東北を語るに不可欠となる、新たな人物の名を知る事となる。

その名を石川善助といい、少し年上の宮澤賢治と交流も持つた同時代人であり、大正から昭和へと移ろいく都市仙台に生き、民俗学や妖怪・幽霊などの関連に強い趣向を示して、時には岩手県沖の海原へ身を躍らせ時空を越えた北方世界のイマジネーションを構築していった、異色のスケール感を持つ詩人・文学者である。一昨年には仙台文学館にて長期の特別展が催されその生き様や壮大な詩世界を追う展示が訪れる者の心に強い印象を残した。

伊達政宗が仙台に誘致し都市の中心・芭蕉の辻に拠点を構えた近江商人の末裔で、商業学校を卒業するも生家は没落、市内の商店勤務を転々とし過酷な労働に耐えながら詩作を続ける。突如職を投げ打つと親族の伝手で岩手県釜石地方の港から捕鯨船で船出し、遠くペーリング海峡までを視野に入れた創造世界の展望を獲得していった。その後活動の本格化を目指して単身上京するが、就業先不振により失職。困窮しつつも在京文学者らとの親交を深め、アイヌを題材とした小説の企画なども進めていた矢先、飲酒後の鉄道側溝への落下事故によつて三歳で没する事になる（その死の経緯には当時の社会主義運動を巡る世相が関係していたとの説がある）。

彼は文学活動の中で宮澤賢治の自費出版詩集『春と修羅』を知り感銘を受け、共通の知人を通じて岩手・花巻の賢治を訪問、民俗や怪異の話題で数時間もの間異常に盛り上がったという。彼の怪異との出会いは、その幼少期の実体験にある―没落前の商家の小屋にて彼は見知らぬ幼女らに遭遇して混乱、以後家産が傾いた事で幼女らは座敷童であり、自身が彼女らを驚かせ家を去らせてしまつた事が生家没落の原因であると、後々自責の念に己を苛む事になったのである。

彼は東京に出た後の生活感覚の変化について、その随筆にしたためている。信仰心が篤く、伝説や怪談を好み、夢占いなどを日課にしていたという善助だが、「・・・でも東京に出て来てからは、何もかも混沌とした、もう、自然に遠く土俗に遠く、霊界に遠く、『数奇に身を消す』ことすら出来なくなりました。」と語るのである。

現代であれば、彼のような資質や文学という展望を持つ人物であれば、おそらく東京へ出るよりは仙台に身を置いていた方がずっと有意義な活動ができ、たとえ苦難があつても豊かな人生を全うできたような気がしてならないのだが、一方で自然や土俗、霊界に親しむ彼にとつて、都市化・東京化の進んだ現代の仙台は却つて彼にとつては空しく息苦しく、結果的には仙台に拠点を置きつつ東北中、はたまた北海道や大陸シベリア地方を巡る旅を続ける人生を送る事になったかも知れない。いずれにしろ、東京は彼に新たな人との出会いや仕事の可能性を示したかも知れぬが、その彼の仕事を生む源の全ては、仙台・東北そして北方世界にあり彼自身それに気づいていたに違いないのである。

※ ところで、彼の表現した「数奇に身を消す」とはどういう意味だったろうか。

数奇（すうき・すき）―風流を好む性質や不運不幸・波乱万丈に満ちた様で「身をやつす」（消）は本来「しおれる」と読む）には「物事にやつれる程に熱中する」という意味がある為、善助自身の愛する、時流的には酔狂で風変わりであろう趣向に、周囲に構わず没頭するという事に間違いはないだろう。

それは、極めて石川善助らしい生き様であると同時に、これからの全ての東北人が、ここ東北という国土において約束された、縄文の時代・蝦夷の時代所縁の自由な生き方、その可能性を示すあり方に他ならぬのではないだろうか。

本誌連載最終となる拙稿は、奇しくも本寄稿のきつかけとなつた、かの日より十五年後の三月十一日に、自身の締切と設定して手がけられた。最後に石川善助の詩の一節を本誌との出会いへの感謝と我が東北の未来への永遠の希望を込めてここに記し筆を置きたい。

北へ、嗚呼あの極光の方へわれら新しい国を建てよう



石川善助・特別展にて
(仙台文学館 2024 年)



SL 銀河



雪の花



カッパ



アラレちゃん

シリーズ 遠野の自然

「遠野の啓蟄」

遠野 1000 景より

今月の十一日で東日本大震災から満十五年経った。いまでも映像を見るとまざまざと当時が思い出される。同時に、震災直後からの支援が途切れる経済復興への道のりを考えると暗澹たる気分になる。

他方、いま世界中あちこちで戦争が起きていてとても落ち着かない。近くで起きているわけではないが、重苦しい空気に押しつぶされそう。

中東の戦争は近いうちに生活にも影響を与えてきそう。余計に気分が滅入る。戦争のないこの国で暮らせてよかったと心の底から思うとともに、東北経済の本格復興に悪影響を与えないようにと心から願う。



S L 銀河



S L 銀河



フクジュソウ開花



小さな春



写真で
お伝えする
東北の風景

「浄土ヶ浜」

写真撮影
尾崎匠

